

私も古希になりました。老人の長話を読んでく
ださいまして、ありがとうございます。

コムロのマサオ君とノリコちゃんが、今も羅津
に向かう砂利道を、泣きながら歩いていきます。私
の胸の中に、二人の少年と少女が、泣きながら歩
いています。

「裸足の子 越えし異郷の幾山河」

鎮魂！

北朝鮮平康・興南から引き揚げて！

千葉県 山田敏夫

まえがき

終戦直前の私は、朝鮮半島の中ほどにある江原
道の公立国民学校の訓導に任じられて、平康とい
う小さい村（邑）に新設された、国民学校に勤務
していた。あの八月十五日の敗戦で、在平康開拓
団の家族を主とする人たちと共に、三十八度線ま
で南下したが、そこで北朝鮮保安隊によって止め
られ、再び北上する列車に乗せられて元山まで運
ばれ、そこで全員降ろされた。私は興南にいる家
族のことが心配で、興南に戻ることを決心して一
人で北上し、ようやくのことで家族に再会し、そ
の年の冬を興南で越すことになった。

平康開拓団の人たちは、元山にしばらく留まっ
ていたが、その後三十八度線を無事に越えて、釜
山までたどり着いたことをあとで知った。

私たち興南で越冬した日本人は、だんだんと食糧事情が悪くなり、飢えと寒さとの中での耐乏生活強いられ、予期しなかった様々な事態に対処しなければならなかった。その一年たるや悲惨窮まりない一年であった。

その平康と興南からの引揚げ体験をまとめて、戦争に負けた国民はいかに惨めであるかということとを、現在の平和馴れをしている人たちに知ってもらい、大きな犠牲のもとに勝ち取った平和を、無にすることなく、これからの世界平和のために頑張ってもらいたいという一念から、忘れ得ないあの時を思い出しながらまとめてみた。

現在でも私たちの日常の暮らしは、必ずしも平穏で楽ではないが、あの敗戦からの一時代のことからすれば、天と地ほどの違いがあると思えてならない。

同窓会長の北村秋馬氏から勧められて執筆したこの拙文が、未来永劫の平和を希求する人々にとって、いささかなりとも役に立てれば幸いと願う

のみである。

一 生い立ち

私は、昭和二（一九二七）年七月二十五日に當時の京城（現ソウル）で、父久治、母たかの次男として生まれたが、後に妹三人と弟一人が生まれたので、結果的には三男三女の兄妹の次男であった。

父は千葉県の出身であったが、大正十（一九二一）年に朝鮮総督府の巡査を拝命して朝鮮へ渡り、以後総督府京畿道巡査として、十七年間の長い年月にわたり京城で勤務していたが、昭和十四年三月に警察官を辞任して、朝鮮電力株式会社へ入社し、江原道寧越にあつた寧越火力発電所の、配給所主任として勤務することになり、一家は寧越へ移住した。それに伴って、私も京城の桜ヶ丘小学校の六年生から寧越旭小学校へ転校し、昭和十五年三月に小学校を卒業すると、同じ江原道の春川にある師範学校へ進学し、教職員の道に進むことになった。

昭和十七年、すなわち太平洋戦争が始まった翌年の春、兄の久夫が京畿道商業学校を卒業して、当時朝鮮における有力企業の日本窒素肥料株式会社ニッポクの興南工場に就職し、社宅を貸与された機会に家族全員をその社宅へ呼び寄せた。父は朝鮮電力を退職して興南で働くことになり、兄の世話で日本窒素肥料工場の住宅係として入社した。

それ以来、一家は終戦まで興南で「楽しい我が家」として、平穏な生活を続けていた。敗戦がなければ、全く平和な暮らしであった。

だが戦争の惨禍は、我が家のささやかな平穏をも容赦なく奪っていった。昭和十九年に兄は徴兵検査で甲種合格となり、会寧の部隊へ入隊、そのままフィリピンの戦場に送られ、翌年三月にバギオで戦死という不幸が我が家を襲った。

そのような環境の中で、昭和二十年三月、私は師範学校を無事に卒業することになり、四月一日をもって江原道公立国民学校訓導に任じられて、月俸四十七円と言う教師の道が始まった。

四月月後には、敗戦という思いもかけない事態が起こるなどということは、夢にも思わずに勇躍して、夢と希望に胸が膨らむ気持ちのまま、平康いんやんか弥栄国民学校訓導として赴任した。

二 平康での生活

辞令を手にして私は春川から汽車に乗り、平康駅で降りて小雨の降る中を学校の所在する産業組合事務所へ向かった。事務所では威儀を正した金井寿一組合長に挨拶をし、他の組合の人にも紹介された。金井組合長の髭が立派だったことが印象深かった。その後この学校のことや、平康の情況などについて説明を受けた。その説明によると、当初この平康産業組合は、満蒙開拓事業の一環として、朝鮮における開拓事業の試験地的な立場にあった。その後茨城県内原の満蒙開拓青少年義勇隊の訓練所で訓練した、山形県出身者を主力とする義勇隊員が、昭和三年に初めてここに入植し、荒廃した土地を開拓しながら家を建て田畑を耕して、努力と苦勞を重ね、十七年の歳月を費やし今

日の姿となったところだった。私が赴任した当時は、八十六戸が六部落を構成しているとのことだった。

また弥栄国民学校の設立の経緯についても説明を受けた。それによると、今までの産業組合には学校がなかったため、生徒たちは片道約八キロメートルばかり離れている隣接の福溪村（邑）の学校に、全員歩いて通っていた。しかし遠路で毎日の通学も容易ではなく、殊に冬季は、寒さと降雪などで難渋したとのことだった。そして、近年になると子弟数もだんだんと増えてきたので、数年前から平康への新設校設置を願っていたのが、今年ようやく実現したとのことであった。

こうして私の教師生活の第一歩が、ここ平康弥栄国民学校で始まった。

新設校なので、校舎などの建物はまだ建設されておらず、組合の第二部落にあった大きな収納舎二棟と、一軒の家屋が仮校舎に充てがわれ、それぞれ教室と職員室になっていた。教室にはまだ生

徒用の机も椅子もないので、土間に直接^{むしろ}筵を敷いて座り、膝の上に教科書やノートを置いて読み書きをするような状態だった。

学校職員は四人で、生徒は百人ほどであった。校長先生は、落合さんといって山形県出身の四十代の経験豊かな教師で、教頭先生は角川さんという春川師範学校を卒業した私の先輩であった。普通の教師は私と、岡山県出身で公州師範学校を今年卒業した、同い年の三澤静江さんであった。

私たち教師は、着任してから校庭代わりになっている広場に国旗掲揚柱を、生徒と一緒に作業をして建てた。教科書は戦時下の物不足のこともあって、必要数の半分ぐらいしか生徒たちに行き渡らなかつたが「勝つまでは！」という合言葉で我慢していた。

生徒の家でもほとんどの父親は召集されて、母親の手一つで育てられているようだった。父親不在の家では作男である現地人が、夜には土間に入って寝ているということだった。

五月一日には、村の鎮守様である東辺神社の境内に、組合員全員が集まって、手造り料理を持ち寄り楽しく愉快な融和の宴が催された。また田植え時には、家族総出で苗植えをするなど、組合が一体となって活気に満ちていた。

五月二十二日は天皇陛下から全国の青少年学徒に対して勅語を賜った記念日で、かつて師範学校にいた五年間においては、毎年非常呼集で起こされ、それから終夜演習が行われた思い出の日ではあったが、私はこの日満十八歳の繰り上げ徴兵検査を受けて、甲種合格となった。死ということが恐ろしくないことはなかったが、この時代は死ぬことが男子の誉れという考えが風靡していた時代であり、甲種合格となった喜びで、心は躍動していた。

戦時下における教育は「寡黙実践」や「信義」などが教育信条で、私自身は実務経験も未熟であり何も分からず、ただ全力をもって生徒への薫陶に当たることのみを心掛け、毎日を過ごしていた。

温厚で人格者の落合校長先生の奥様が亡くなられて悲しみの六月十四日に、米軍の飛行機が四機、突然に低空で侵入してきて機銃掃射を浴びせた。超低空だったので乗員の姿もよく見えた。悔しかったがどうにもできなかった。幸いに生徒などに怪我人はなかったが、朝鮮には空襲がないといわれていた安心感が根底から覆された。

それからは、学校挙げての防空壕掘りや、待避訓練が必須の授業となった。航空燃料確保のための松根掘りなどが、日常の作業となってきたが、その合間には学芸発表会の準備も行われることになり、私とさして年齢差のない女子生徒へ遊戯指導もしていた。学芸発表会の当日は、それまでのそれぞれの生徒の努力の結果が次々と披露されたが、その中でも高等科二年生の山口君の歌った、文部省唱歌の「落日」は、半月後に迫りくる日本の運命を、知らず知らずのうちに暗示するがごとくであったことが、後になって思い合わされたものであった。

その歌詞は、

「一、野は里は黄昏染めて、連なれる山の頂、

さわやかに光匂えり

(二番 略)

三 言葉なく眺めてあれば、わが胸の奥にぞ

透る、落つる陽の尊き光」

八月六日、広島に新型爆弾といわれた原子爆弾が投下された、というニュースを伝える夕方のラジオ放送を、私は京城の南大門北側の路上で聞いた。その日は学校関係の打合わせで京城へ出張していて、生まれ育った京城の町並みを懐かしさいっぱいで歩いていたのだった。その三日後には長崎にも投下されて、無辜の住民がひどい戦争の犠牲になったことに憤りを感じ、言葉が出なかった。

三 終戦そしてソ連軍の進駐

八月十五日、午前の授業を終えて汗を拭きながら職員室へ戻ると、校長先生と教頭先生が土間の上り框かまちに腰を降ろして額を寄せ合い、何かしら沈痛な面持ちで、ひそひそ話をしていた。何事かと

聞くと「日本が戦争に負けた」と言われた。私は我が耳を疑ってもう一度聞くと「今東京から重大ニュースということで、天皇陛下御自らの勅語が正午から放送されるという。それによると、日本はポツダム宣言を無条件で受諾したとのことだった」と、小さな声で校長先生が私に言った。私は目の前が真っ暗になり、頭の中は真っ白になったような気がした。

正午の玉音放送を聞いた後、しばらく経って気を取り直して、これからの運命はどう展開していくのかと思いつながら、防空壕のある裏山へ行った。裏山に立って遠くの山を見ているうちに「このような戦争は、今回限りではなく、後世数次に渡って続くのだろうか？」というようなことが、何となくではあったが、それが靈感めいた神のお告げであるかのように、一瞬脳裏を過ぎたことを覚えていた。

敗戦となると、まるで真綿で自分の首を締めつけられるように、いろいろな事態が次から次と起

きてくるだろうが、それが一体どんなものであるのか、そのときは想像もつかなかった。ただ、今までと異なった相当な覚悟は必要であるという、漠然とした考えだけは、はっきりと心に浮かんできた。

「この戦争はいずれは勝つ！」と、生徒に教えていた私の責任はどうなるのか、そのことだけは入道雲がどんどんと沸き出てくるように、心の中を占めてきた。外国になってしまったこの大地に立った私の頭上には、八月真っ盛りの太陽がさんさんと照りつけていた。防空壕の向こう側にある土手の上の道を、朝鮮服のズボンをはいた三、四人の子供が「朝鮮勝った！ 日本負けた！」とか「解放だ！」などの叫びを繰り返しながら、小躍りをして走って行った。

校長先生以下四人の教師が、職員室に集まって誰もあまり口をきかず、ただ一人一人考え込んでいた。話をしたところで明解な答えが出てくるわけでもなく、誰もが想像でしか答えが出ないの

だから、必然話し合いにもならなかった。重苦しい一日だった。

翌朝になると、つい二、三日前に学校の用務員として雇い入れた体格の良い朝鮮人が、職員室の教頭席に座り込んで動こうとしなかった。そして顔に薄笑いさえ浮かべて、私たちのいうことは全然聞かなくなった。

そのうちに、福溪に駐屯していた日本軍の小部隊も、列車で南下したという話が伝わってきた。いよいよ頼りになるのは、平康にいる開拓団だけとなった。当時残っているのはごくわずかな団員と、あとは老人と女、子供だけなので、六部落の代表が集まっては、どのように行動するか相談ばかりし合って、なかなか実行する決心がつかないままに日が過ぎていた。

そのうちに、とうとう恐れていたソ連軍の姿が、この平康にも現れた。平康の街外れにあった結核療養病棟や、駅に停車している列車内などに分かれて進駐していた。ソ連軍が進駐してくるとすぐ

に、略奪、暴行などが始まり、三、四人のソ連兵が徒党を組んで、駅前の商店や民家など当たりかまわず侵入し、それがだんだんとエスカレートして市街地を通り越してきて、開拓団の各部落にも押し掛けるようになった。

ある日のこと、ソ連兵に一人の娘さんを強引に引きずり出されたのであろうか、近くの空家に連れ込む様子を、職員室の窓越しに見た。そのうちにその娘さんの泣き叫ぶ声が、辺りの静けさを破るように響いてきた。その泣き声は何をされているのか、その事実を物語るに十分なものであった。その娘さんは、療養所長の娘さんだったということを知っていたが、私が引揚げ後に知った話によると、その人は気の毒にも自殺をされたということだった。その泣き叫ぶ声を聞いた私には、それがいつまでも耳の奥に残っていて、やり場のない気持ちで随分と悩んだものだった。

さらにこんなこともあった。それもやはりソ連兵の一团が、学校に一番近い所にあった麓村の開

拓団の北川さんを捕らえて、ピストルで脅しながら道案内に立てて、虎岩山の麓にあった産業組合の事務所に押し入り、金庫を奪おうとしたが、金庫の中が空っぽと分かるや、その腹いせからピストルを乱射した。その一弾が北川さんの腕にも当たって、ひどい傷を負ってしまった。長い間包帯で前腕を包んだ姿は、見えて痛ましかった。

八月三十一日の朝から角川教頭の姿が見えなくなって、私は一人でどうしたのかと心配していた。「ひと言、行き先ぐらいいは知らせて行けば良いのに！」と思っていたが、校長先生の姿も見えずに、そのまま一日が過ぎていった。その日の夕食に私はカレーライスを作っていた。

そこに落合校長先生が朝鮮服の姿で入ってきて、「みんな鶴村に集まっているから、これからすぐに行こう」と言われた。夕食を二人で食べてから、家から大事に持ってきた、兄からのプレゼントの国民服などをリュックサックに詰めて、校長先生に従って学校をあとにした。

鶴村は平康開拓団の部落の中で、南側の一番離れた所にある部落であった。暗がりの中、鶴村に着いた。そこにはすでに全員が集まっていた。

主だった人たちによって「今から南に向かつて、徒歩で避難すべきか、否か」についての協議がなされている最中だった。「ソ連軍側からの『婦人メイドを、深夜においても必要とするので、差し出せ!』と言う指示には、我々は到底従えない」という決議で、衆議一決避難することに決まった。

昭和三年以来、十七年間に渡ってあらゆる苦難を克服して、営々として築いていたこの平康開拓団を捨てて南下することは、団の人々には随分と抵抗心があったと思うが、ことここに至ってはそれ以外に取るべき手段がなかった。遠くの方で脅しのためか、ソ連兵の発砲する自動小銃の音が、澄み切った夜空に不気味に響いていた。

私が日本に帰ってから、角川教頭に再会した際に聞いた話では、急に姿を消したわけは、三澤先生を南下する列車に乗せるために、二人で誰にも

気付かれないように平康駅へ行ったため、このことだった。三澤先生を列車に乗せた角川先生は、夜部落へ戻ったがすでもぬけの殻だったため、一人で避難行をしたとのことだったが、その労苦は容易なことではなかったと語られた。

四 徒歩と貨車での避難行

女、子供を主体とした徒歩集団による避難行が、その夜から始まった。数頭の山羊を引き連れていたが、それは乳飲み子用とのことだった。当目の目標は三十八度線を越えて京城に向かうことだった。二、三夜は星空も美しく、北斗七星がまばゆい光を放っていて、歩いている方向を知らせてくれた。夜明け前には、東の空に明けの明星が美しく輝いていて、未来永劫を感じさせてくれた。だが現実はそのそんなに美しいことばかりではなかった。鉄原を過ぎるころになると「もう、これ以上は歩けない!」と言ってしゃがみ込む女の人が出てきて、それをどうにかして歩かせようと、叱咤激励する主人らしき人の声が、暗闇の中から聞こえて

くる。道中であちらこちらからの避難民が加わってきて、だんだんと人数が膨れ上がって大きな行列になった。昼間は山林などの中に潜み、夜になると歩くという繰り返しであった。

平康を出てから八日ぐらいが過ぎていたと思うが、日中は雨にたたられながらトウモロコシ畑の中を歩いていた私は、突然に疲労と空腹とでへたと倒れ込んでしまった。元気なつもりのも私ではあったが、疲労と空腹には耐えられなかった。暗かったので他人の目にはつかかかたと思う。

そのとき私は、出発時に開拓団の加藤さんから食べてもよいからと預かっていた頭陀袋ずだぶくろの中の米香煎を思い出した。預かったときには「人の物には手などつけるものか！」と、頑なに思っていたが、現実には空腹でへたり込むとその信念が揺らいできて、一つかみを口に入れた。すると、何と膝に力が入ってきて立ち上がって歩けるではないか！ 体内の活力循環が回復したのだ。このときほど、体力と食べ物との不可分な関わり合いを強

く意識したことはなかった。その夜は現地人の家の土間に暖を求めて倒れ込んだ。着ていたものも乾かすことができず、気力、体力が急速に回復した。

朝鮮には昔からの言い伝えで、炊き立ての熱いご飯に冷水をかけて食べると短時間で食べられるとか、小用をすると二里（朝鮮の距離で約八百メートル）ぐらい人に遅れるなど、避難に関することが教訓として伝えられていた。昔、戦国時代のことを書いた本を読んだときにも、勝者も敗者もそれぞれに様々な試練があったということを思い出した。「我々の今が、その試練なのだ！」と思ひ、ひたすら歩くことに耐えていた。

九月十日、平康を出てから十日が経った。大雨の中を三十八度線のやや北にある漣川ヨンチョクによって着いた。そこに駐在していた保安隊員に「この先には臨津江イムジンガンに架かっている橋があるが、そこは通行禁止なので、ここから南下はできない！」と言われ、そのまま拘留されて学校の講堂に収容さ

れた。

十日も歩いていたので、体力も気力も失っていた。「収容でも何でもしてくれ！」という自棄^{やけ}っぱちの気持ちで指示に従った。雨露のしのげる建物の中で、久しぶりに手足を伸ばして横になって休んだ。それからゆっくりと講堂の中を見回した。教壇の脇にくぐり戸があつて、狭い控室へ続いていた。私は興味が湧いてきて、その小部屋に入ってみた。そこには国語の教科書などが積んであつた。その教科書の文中には「蓑虫の一生」と題したところがあつたので、久しぶりに文字に接し読みふけてしまった。その文中の内容は「蓑虫は枝葉を糸で絡げた中に入つて一生を終える」という、蓑虫の生涯を綴つたもので、読みながら今の我が身と比べて思いふけてしまった。

ここで収容されている間に、若い女性は長い黒髪を断ち切つて丸坊主になり、顔や手足に泥や鍋炭を塗りたくつて、男のような格好に変身していた。その人たちの心中を察するに、穏やかな気持

ちにはなれなかった。

その夜、この地の有力者と思われる年配の朝鮮人が、教壇の上に仁王立ちになり、拳を振り上げながら激しい口調で「我々朝鮮人は、日本の三数十年間にわたる植民地政策に耐えて、今輝かしい独立を勝ち取つたのだ！ 歴史は転換したのだ！」などと叫んで、私たちを洗脳しようとしていた。

ここでは毎食握り飯一個ずつが配られたが、それを食べるとあとは何もすることがなく体を横たえていたが、横になると今までの蓄積された疲れがどつと出て、すぐに白河夜舟となつてしまった。みんなが寝静まるころを見計らつて、青年保安隊員が三人グループを作つて入ってきた。前から目をつけていたのだろうか、すぐに一人の娘さんを連れ出そうとした。その両親が素早く目を覚まして、平身低頭して断っているのを、遠く離れた所から私も見ていたが、飛び出して行つてこれを阻止するだけの勇氣はなく、可哀想にと同情しながら

ら、事の成り行きを見るだけだった。どうせ飛び出して行っても銃の台尻で叩きのめされるかと思うと、立ち向かう勇氣も氣力もなかった。あとになつて冷静に考えてみると、「何か、自分でできる方法がなかったか？」と悔やんだが、あとの祭りだった。

朝鮮人があの壇上で正義面をして我々を洗脳しようとする反面、こんな無法なことをまかり通していることに大きな矛盾を感じたが、それ以上のことはなす術もなかった。ややあつて、泣きながら娘さんは戻ってきたが、両親と娘さんの氣持ちを考えると、胸が痛んでどうしようもなかった。一部始終を見ていた私にとっては、特に耐え難い事件であった。

一昼夜近くそこにいて、再び北に戻されることになり、貨車に乗せられて元山方面へ向かった。これからどうなるのだろうかと考えたが、どうにもなることではなかった。平康から南下するときには、まだ少しでも南に行けばという張り合いが

心中にあったが、今度はそのような氣持ちにもなれずに、運を天に任せるだけだった。

鉄原駅では到着したのか、またここから出発してどこかへ行くのかは知らないが、ホームにいる大勢のソ連兵と、すれ違う列車の中のソ連兵とが、お互いに「今日は！」と言いながら握手を交わしている光景を横目で見ながら、我々の貨物列車は北上を続けた。

十日間をかけて苦勞して離れてきた平康駅も、列車は何の思いもなく一氣に通り返っていった。平康から約五十三キロメートル北の高山駅に着いたが、理由も分からないまま長く停車していた。このまま元山へ向かうのかと思つたら、どうしたことかまた南下を始めた。理由は何も知らされず、全くソ連軍任せだった。私たちは既に「俎上の魚」となっていた。すると思いもかけずに列車は、朝出発したばかりの漣川駅のホームへ到着した。ここで再び降ろされるのかと覺悟をしたが、降ろす氣配はなく、組合で手配したのか握り飯が配られ

た。朝から何も食べていなかったもので、そのおいしかったことは今でも覚えている。その夜はこの貨車内で寝ることになった。

翌朝、貨物列車は再び北に向かって動き出した。どうしてこんな混乱になったのかは良くは分からないが推測するに、三十八度線を越させるわけにはいかないこの避難民をどうしたら良いのか、ソ連軍側も保安隊側も手の施しようがなく協議に行き詰まり、指示・指令が一貫しなかったのではなにかと考えた。

途中からこの列車に乗り込んできた朝鮮人の青年グループの一人が、私たちが腰を降ろしていることを苦々しく思ったのか「そこをどけ！」と怒鳴り散らした。私はその青年の行為を苦々しく見ているが、ついに彼の視線と私の視線がぶつかってしまった。その瞬間、彼はつかつかと人を押しのけながら私の前にやって来ると同時に、彼の平手が私の頬を打擲した。何の理由もないことで、私は多勢に無勢の態勢で、しかも生徒や父兄もい

る前での暴行だった。私の面目は丸つぶれとなったが、ここは我慢のしどころと耐えるしかなかった。多少腕に覚えはあっても、ここで無益な反抗をしても勝ち目はなく「我慢するのだ！」と、自分で自分に言い聞かせ無抵抗主義を貫いた。

平康では朝焼け雲が美しかった。ついこの間までの平康と違って、今日は他国の地であるが「国破れて山河あり」の漢詩が、知らず知らずのうちに口をついて出てきて、何かしら心が洗われたような気持ちになっていた。福溪駅の改札口では、着剣の吊り銃を肩にしたソ連兵の姿に、日露の歴史の転変を現実はこの目で見て、感慨無量なものがあつた。

列車は前日の折り返し駅、高山駅を今度は何事もなく通り過ぎて、元山に着いた。これ以上北には行くまいと全員半ば自発的に下車をし、駅前に整列した。金井組合長以下の主だった人たちは、直ちに交渉のためにソ連軍の事務所へ行った。

私は、この避難行の往復の間に考えていた、「さ

らに北へ行って、興南の家族の所へ帰るべきだ」との決心を、実行するのはこの機会だと考えた。その理由は、まず所持金が底をついていたことだ。そして一番大事な食べるものは、自分では何一つ持っていない、すべて人に頼っている状態である。このままではこれから先も他の人に頼るのみである。みんなの足手纏いにはなりたくない、などの理由が私の気持ちの上に大きくのしかかっていたからだ。私の気持ちは、今までも校長先生や組合長に話していた。「私にとって日本は行ったこともなく、全く知らない所です。この避難団体の人たちと共に無事に日本へ帰っても、私には帰る所がない」という私の気持ちを伝えると、そのつど「先生一人ぐらいはどんなことがあっても面倒を見ますから、心配しなさんな！」との有り難い言葉を頂いた。

しかし私の決心はここで急に固まってきた。組合長の一行が戻ってきてから行動するのが当然のこととは理解していたが、私の心は焦りに焦って、

寸刻もじっとしていることができなくなり「残っておられるご夫人方に挨拶することで勘弁して頂こう。日もだんだん落ちてきたので、早い方が良い」という自己判断で、周囲の人にも簡単に私の考えを話して理解を得た。「生徒を連れて日本へ引き揚げる責任は？」という気持ちが心をよぎったが、それよりも興南へ行く気持ちの方が勝っていて、平康産業組合の人たちとそのまま別れた。

五 平康産業組合のその後

私が離れたあとの産業組合の一行は、十月下旬まで約一カ月半の間、元山に抑留されていたようだ。その後、ソ連軍の指示によって福溪駅まで貨車で送られ、そこから徒歩で懐かしの平康の各部落の我が家に戻されたようだが、各部落の家はほとんどソ連軍宿舎になっていたので、生活することができず、少人数のグループを組んで再度平康を離れて漣川へ向かって徒歩で避難したそうだ。

三十八度線も何とか無事に越えて、京城の朝鮮神宮の跡地で落ち合い、そこから釜山へ行き、大

部分の人は昭和二十年の暮れまでに日本へ引き揚げる事ができたとのことだった。

金井組合長の一家と行動を共にした数家族は、金井組合長がその責任上、みんなを送り出してから平康を出発されたので、順調には行かず、寒さが加わり雪の降り出した山道を歩いたり、支流の多い臨津江流域を徒渉したりして、京城に着いたときには真冬になっていたようだ。さらに朝鮮神宮の奉賛殿で越冬したらしいが、金井組合長もご夫人も病気になり、その上その間に二人の子供たちも亡くされたとのことだが、昭和二十一年一月末に釜山までたどり着き、以後博多港に上陸し、二月には苦難の旅を終えられたとのことだった。

六 興南での越冬生活

元山で平康産業組合の一団から一人離れた私は、目の前の元山駅へ向かった。駅の構内に入るときに駅員からとがめられたが、うまく逃れて構内にもぐり込み、北行きの貨物列車に乗り込んだ。間もなくその列車は大勢の朝鮮人を乗せて動き出し

た。しばらく走っているうちに、とある駅に停車した。そこは高原という所で、列車はそこで停車し夜を明かした。私は仕方なく駅前に出たが旅館のようなところがなかったため、野宿をするつもりで駅構内でうずくまっていたら、通りがかった人が「日本人は殺されるぞ！」と、言った。しかしそれをいちいち気にしては何もできないので、何かが起きればそれはそのときのことと、腹をくくって一夜を明かした。

翌朝再び列車に乗って咸興駅に着いた。ここまで来れば家に帰ったも同然と思ひ、元気が湧いてきた。興南へは歩いて行った。懐かしい父母、久しぶりに会う弟妹たちは元気にしていたので、抱き合って喜んだ。

興南にもすでにソ連軍が入っていて、朝鮮人と共に日本人いじめをしていたので、剣呑な状態であった。私が帰宅した翌朝には、些細なことでも温厚な父が朝鮮人に殴られるということが起きて、私は驚かされると同時に、覚悟を新たにしました。

街中には「ソ連兵が日の丸の旗を片方の靴で踏みつけ、赤旗を住民に手渡ししている」図柄のポスターが、あちこちに張り出されていて、そのポスターの横には「ソ連兵に歯向かう者は銃殺する」と書かれた張り紙が出ていて、恐怖心を煽っていた。

ソ連軍の進駐によって興南の行政権はすべて朝鮮側へ移ってしまい、日本窒素肥料会社もソ連軍に接収されて、日本人社員は全員追放されていた。父も解雇されて働く場所はなかった。しかし食っていくためには働かねばならないが、その職は人が嫌がる重労働か、汚穢おとろな作業しかなかった。敗戦前の日本人の立場は、まさに逆転してしまっていた。今までの私の心の中には、日本人としての優越感と、優秀民族という自惚うぬぼれがあったが、この興南での様子を見る限りにおいては、歴史は間違いないと転換しているのだということを、しみじみと感じた。

この興南市は道庁の所在する咸興市に隣接して

いて、日窒関係の工業都市としてそれなりの繁栄を極め、人口は当時約十九万人で日本人も多かった。だが今は、安穩とはしておられずに働き場所を探したが、なかなか見つからなかった。家の窓から見えた苹果アップル（リンゴ）畑の農家へ行って、主人に頼み込んで働かせてもらったが、最初から私の作業振りが気に入らずに、途中で「もういいから帰ってくれ！」と言われたが、私は知らん振りをして働き続けた。そのうちに主人も諦めたのか、小言を言わなくなり、夕方には腹いっぱい粟入りのご飯を食べさせてくれて、賃金ももらった。二、三日続けたが、そのうちにその仕事も終わってしまった。

九月二十日は、お盆の中日（朝鮮伝来の名節）で秋夕チュソクといって先祖の霊を祀る年中行事の大切な日であった。だが我が家ではこの日に、ソ連軍の軍政府側の指示で、日窒工場の近くにあった柳亭里の住宅を明け渡しことになった。五部屋もあった広い家だったが、強制移転させられた行き先は、

ここから約三キロメートルも離れた鷹峰里^{ウンボンリ}の朝鮮人住宅だった。

家財道具の大部分はそのまま残しておくように言われたので、手に持てるだけの当座必要なものだけを持って移転した。どうしてこのようなことになったのか、その理由を私はよく知らないが、立場の逆転した今では文句を言うこともならず、言われるままにするしかなかった。まさに都落ちの悲哀をしみじみと感じながら家族は小さな峠を越えた。途中でキリスト教の教会らしき家の前に、水を入れた馬穴に柄杓が添えられて出されてあった。その家の方の気持ちに、私たちはどれほど心が癒されたか知らない。

峠を越えて下り坂を歩いたので、持っている荷物が重くて仕方がなかった。そこに通りかかった荷駄引きの中国人に「いくらで運ぶか？」と聞いたところ、こともなげに「五十円でいいです！」と言った。当時五十円といえば大人十日分の日当にあたる額だった。「いいです！」という言い方も、

弱みにつけ込んだ法外な値にも、みんなは呆れ果てて二の句が継げなかった。その夜から家族は、何かというと「五十円でいいです」と言い合っては笑わせたものだった。

鷹峰里の住宅に着いてみると、住宅とは名ばかりの棟割六戸の長屋で、同じような建物が二十棟ぐらい並んでいた。一戸は三畳ぐらいの温突部屋^{オンドル}が二部屋だけで、かまどは外にあった。その一戸に二所帯が割り当てられたが、家族七人が横になるのがせいぜいだった。当然家具など入る余地はなかったし、かまども交代で使用することになった。疲れもあったが、その日からは雑魚寝のやむ無きになった。

翌日になると、早速ソ連兵がやってきて物色を始めた。父が銃で脅かされて、持っていた僅かばかりの金と、絹織物を強奪された。前日の強制引越しに続く強奪で、我が家も一挙に奈落の底へ落ち込んだ。

新聞もラジオもないので情報が全く入らず、世

間がどうなっているのか不安であったし、夜は夜でソ連兵の侵入で、母や妹は寒さの厳しい中を外に避難して回っていて、容易なことではなかった。男性が夜警に立ち、ソ連兵が現れると、金だらいななどを叩いて追い払っていた。当然風呂などにはなかなか入れず、ときどき沸かしても芋を洗うようであったが、それでもないよりはましと思ひ、我慢して入った。

そのうちに日本人世話会が組織されて、引揚交渉などに当たるということで、一応は心強くなった。食糧の配給はあったが円滑ではなく、やみ米に頼るしかなかったが、しかし米一升が十三、四円で、現金を強奪された我が家では、少し持ってきた衣類を売る他には手立てがなかった。やみ米も長くは続かず、一家は空腹の現実に苛まれた。今まであった三度三度の食事が欠けてくると、精神的にも変調をきたし、落ち着きがなくなる。大豆粕ならまだ食べられたが、米糠となるといくら空腹でも受け付けなかった。

絶食が続いていて働く気力もなく一家は横になつていたが、ある日の朝、母の知人が「あんなに明るかった山田さんが！」と言って、お米を持ってきてくださった。人の情けに泣いたが、こんなことは続くものではない。妹の綾子が大事にここまで持っていた人形を、ソ連人の家へ売りに行き、多少のお金を得て食べ物に替えてきたときは、妹が天使に見えた。またある日、はたはた 鱒を何匹か買ってきたが、私はわけも分からずに生のまま飲み込んだが、あとで思うと何という様であったかと反省した。

十月の半ば、旧日窒硫安工場で硫安の荷造作業に日本人を募集していると聞いて、父と一緒に応募した。硫安の山の前で作業についての説明を受けたが、三十キログラム入りの吠を一人当たり六十俵、十人一組で六百俵を積み上げるといふ仕事だった。硫安の山をつるはしで崩し、それをシャベルで吠に入れ、看貫秤で三十キログラムを確かめて、荒縄を二重にかけて積み上げるといふもの

で、馴れないうちは重労働だった。日当四円五十銭だったが、米一升が十四円ぐらいたったので、三日働いてやっと一升が買える計算だった。馴れてくると十五時ごろには仕事が終わわり、風呂にも入れた。以前からこの職場にいた人の中には、仕事に精通していて手並みは鮮やかだったが、その代わり誰彼なく怒鳴りつけるので、煙たがっている人も大勢いた。

十一月三日の明治節には、仕事を始める前にみんなで東方へ向かって遙拝し、敬虔な気持ちになった。小学生の弟が、吠にあらかじめ縄を通しておく作業に、弁当持参で手伝いに来ていたが、帰ってからの話で「大人が弁当を取り上げて食べてしまった」と言っていた。

十月末のこと、父と市内を歩いていたときに、私は突然腹痛に見舞われて、しゃがみ込んでしまった。たまたま父の知り合いの中国人の張さんの事務所の前であつたので、父は私を担ぎ込んだ。

張さん自身が、私の腹部を丁寧にさすったり、薬

を飲ませたりしてくれた。ほどなく痛みも治まった。これが縁となって十一月になってから、弟と二人でここに住み込んで働くことになった。

仕事は市の汚穢作業で、牛馬を引いて各戸の糞尿や塵埃を收拾して処理するものだった。以前は中国人がこのように働いている姿をよく見かけていたが、まさか自分がこの仕事をするようになるとは、夢にも思わなかった。しかし生きるため、食べるためには仕方ないことだった。朝五時の合図と共に、どんぶりを持ち粥の朝食を受ける。中身は五穀にニンジンが入っていたが、米は少し浮いて見えた。朝食が終わると牛馬へ飼い葉を与え、七時にはそれを引いて市内へ出る。私は中国人に「小孩ショクタイ呼ばわりされながら働いた。私は働くテマンマデーンボが早く、仕事も丁寧過ぎるので「慢々ホウ的、好」とか「休め、休め（ヒエ、ヒエ）」と言われた。昼は普通のご飯で、夜はまた粥食だった。だが、食べることの心配がなく有り難さが身に染みた。張さんの母親が、私と弟が痩せこけているのを見る

に見兼ねたのか、自分の部屋の土間で餃子を食べさせてくれたこともあった。私たちにとっては慈母のように見えた。

この仕事をして一カ月経ったが、汚い作業なのに風呂にも入れずに働いていたせいか、やがて高熱を出しうなされるようになった。一応張事務所での仕事を辞めて家に帰ることにし、家までの約三キロメートルを二人で帰ったが、歩くのもきつかった。思っていた通り発疹チフスにかかっていた。家に帰るとすぐに戸板に乘せられて、松ヶ枝町にソ連軍の開設した臨時病棟へ運ばれたが、母はどこでどのようにして工面したのか、私たちを運んでくれる人に握り飯を渡していた。

収容された病棟には老婆が一人入っていたが、弟と二人で半月ばかり過ごした。退院したのは大晦日であった。翌日の昭和二十一年の元旦には、家の前で銃剣術の構えをして足腰を確かめてみたが、思ったより力が入っていた。

二月になると道路工事に出て懸命に働いたが、

日当六円と言われたのに五円しか払われなかった。内心穏やかでなかったが、致し方なかった。しかし、凍った土につるはしを打ち込むのは、大変に骨の折れる仕事だった。工事現場の傍らを、日本軍の捕虜が大勢通過して行った。寒さと飢えで亡くなる人が増えてきて、遺体は菰ももに包まれて共同墓地へ運び、私たちが掘った溝に三段重ねで埋めていった。

七 興南から引揚げ

三、四月になると、さすがの北朝鮮の寒気も薄らいできて、色物をまとった少女たちが歩くようになってきたし、野良仕事も始まり全体に活気が出てきた。五月になるとそれまで皆無だった食料品の配給があり、海藻ひじきが配られたが、それは主食でもあった。だが日本への引揚げの話は、具体的には何も伝わって来なかった。閤船を雇って引揚げるとして実行した小林さんたちは、乗船したあとに保安隊によって捕まり、せつかく持ち込んだ荷物も取られたとのことだった。船内では

コップ一杯の水が、二千円もするという話も伝わった。

昭和二十一年の五月に、引揚げが現実のものとなった。興南在住の日本人は、咸興駅まで歩いて集合させられた。父は四月の中旬に栄養失調から体を悪くして、咸興病院に入院していたので、ひと言連絡だけでもしたいと思っていたが、団体行動を取っているので勝手なことではできずに困っていると、母が「お父さんは病気が治ってから帰ってくるよ！」と言って、非情のごとくに落ち着いていた。

母を中心にして私と弟、そして三人の妹の一家六人で、興南を引き払うこととなった。咸興から有蓋の貨車に詰め込まれて元山に着いたが、そこで何の説明もないまま、三日間引込線に停車したままとなった。その間何の給養もなくひもじい思いをしたが、辛抱するより他はなかった。

三日目の夜にやっと動き出したが、疲れからぐっすりと寝込んでいて、気がついたときは朝にな

っていた。母が「昨夜の海の上の月はきれいだった」と教えてくれたので、外金剛の東海岸を走っていることが分かった。高城に着き、やっと貨車の外に出ることが許されて、小休止した。ここは師範学校を卒業する前に、教育実習で二カ月勤務した懐かしい所だった。

そこから三十八度線に近い襄陽サヤンに着き、全員下車した。ここから三十八度線を徒歩で越えるのだが、生憎と小雨が降っていて、喜びより物憂い気持ちの方が強かった。母や妹たちを励ます立場にある私だが、そんな気力はなかった。三十八度線を越す山頂では、警戒のソ連兵二人がこちらに背を向け腰を降ろして、我々には関心を示していなかった。雨も上がり、日照りの中を無言のまま歩いたが、母は途中さしていた日傘を、米と交換していた。一升での取り引きが五合しかくれなかったあとで計量法が日本と違うことに気付き、笑い話になった。道は特に険しくないので、子供連れの我が家も、人並みに三十キロメートルばかり

の道程を、無事に歩いて注文津に着き、米軍に収容された。

そこでは検疫を受けたが、様子を見に集まってきた人の中に、同窓の松浦君がいて、再会を喜び合った。友達の有り難さをしみじみと感じた。この収容所で二晩過ごしたが、米軍は手際よく世話してくれた。

父を威興の病院に残しての引揚げではあったが、家族一同がそろって日本へ帰れるということは、最大の喜びであった。凍土の土と化しても致し方ない運命であったのだから、その喜びは当事者でなければ分からないであろう。

五月二十二日、注文津の沖合に停泊していた、日本の中型商船に乗船した。私は下の妹を背負って、船側に垂らされた綱をよじ登った。臨時配船の船であることは知らされていたが、給養は極めて少なく、一日にお玉一杯分のお粥だけで、みんなの飢えた目が食缶が運ばれて行く行方を追う姿を見せていた。

二十五日の朝、釜山港に寄港した後、一路博多港へ向かい、五月二十七日に博多港の岸壁に停泊し、その日はDDTを頭からかけられて真っ白になった。翌二十八日、夢のまた夢だった日本の本土に上陸して、大きな釜で炊かれた白いご飯を食べさせられた。

八 引き揚げ後の生活

引揚専用列車に乗り、父の出身地千葉へ行くことになった。鉄道線路が狭軌であるので、朝鮮の鉄道と比べるとすべてが小ぎれいで、整備が行き届いていると思つたことが、初めて目のあたりにした日本の印象であった。東京駅に着くと奉仕の学生が秋葉原まで付き添ってくれた。茂原の父の家に着いたときには、家族から涙で迎えられたが、余りのみすぼらしさに「本当に何もななんだね！」と言われた。そこでは農家の労働力として私への期待も少しあったように思えたが、二、三日後はその家の跡継ぎの長男が復員してきて、私たちの占める場所がなくなり、一キロメートルばかり

離れた、桶屋どんという屋号の一人暮らしのお婆さんのいる一室に、同居ということになり、布団もない生活に戻ってしまった。

私は当座の暮らしのために茂原市の鉄工所の雑役に雇われ、その合間に本来の教師としての復職を願って外務省へ行き、手続きをした。母は親戚回りをして、農作業で忙しい家に妹の綾子を引き取ってもらうことにした。茂原市教育委員会を訪ねたところ、私の勤務先は太東国民学校と言われた。九十九里浜南端の太東村は「雲の峰、太東崎に消えにけり」の句で有名な、静かな広い田舎村であった。仲野教頭の計らいで村の円頓寺本堂の一室を借りることになり、一家はここに転居した。

九月六日、太東国民学校に初出勤して、三年一組の担任となった。一年前のこの時期、平康で担任した三年生と避難中に別れたが、今再び三年生を担当するということに不思議な命運を感じ、生き生きとした子供たちに接して蘇生できた喜びに浸っていた。そして父も帰国して、私たち一家の

引揚げ行動は終わった。

九 父の引き揚げ

父は私たち一家が興南から引き揚げるときには、咸興の病院に栄養失調症と脚気で入院していて、家族が日本へ向かったことを知らなかったが、五月二十二日に退院し鷹峰里の家に戻って初めて家族の帰国を知り、三防峡まで列車で南下した。それから先は単身徒歩で九十キロメートル離れた米軍管理下の高浪津まで、一日平均八キロメートルを歩いたそうだ。さらに汶山から開城に送られ、そこで約一週間滞在し、仁川港から博多へ向かったが、船内でコレラの疑似患者が発生したために、十日間沖合いに留められ、やっと六月二十七日に博多港に上陸、そのまま筑紫病院に入院させられた。

さらに静岡の浜松病院へ転送され、七月には郷里と言うことで千葉の下志津病院へ再転院し、やっと十月になって家族と合流できた。重症を克服して無事に家族の元に戻れたことは、奇跡としか

言いようがないが、やはり父の基礎体力の賜であろう。

十 生活再建

戻ってきた父は衰弱した体も徐々に快復し、保険外交に精を出し、また副業としてヤクルト販売に励み、勤続三十年を迎え、そして家族一同の努力の結集として、昭和四十五年には自宅も新築した。

私も太東国民学校から勝浦の中学校へ転勤したが、母に求められては給料の前借りをしたこともあった。昭和二十五年には、創設された警察予備隊へ入隊した。母は私が家から離れることで随分悩んでいたが、その代わり親許への送金は欠かしたことがなかった。二十七年間の防衛庁勤務を終え定年退職し、さらに再就職をして、それも無事に終えて現在に至っている。私の終戦前後の体験は、二度と望みたくないことながら、生きながらえてみると、天与の試練だったと思えてならない。

北朝鮮と韓国は、終戦と共に同じ民族が南北に

分断されるという悲劇のまま、今日に至っているが、これではならないと思うものである。一日も早く良い解決を願うこと切なるものである。